



筑紫女学園大学リポジット

The Writings of Shu-Eki (I)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永淵, 道彦, NAGAFUCHI, Michihiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/724

周易 覚書 (一)

——占筮易断の基礎知識について——

永淵 道彦

はじめに

焚書坑儒による秦の始皇帝の文教弾圧が強行された時、周易は占筮せんぜいの書であるということ、その厄を免れている。その反面、当時の儒者や知識階級にはすでに人生哲学の教典として認められていた。この両面を、現代では人生哲学を説く儒者の教典という意味では「易経」と呼び、占筮の意味では単に「易」と称している。また、その成立時が殷末周初であるところから周易とも称される。

周易は占筮の書から人生哲学の教典へと発展したと言えるが、その成立時においても人生哲学を内包し、また現在においても上記したように、この両面は表裏一体を成している。本稿ではその成立時に立ちもどって周易の呼称を使用し、この両面をパラレルに捉えて、周易とは何かを探求していくことにしたい。

占筮が終わって卦形を得れば、易書を繙いて吉凶（得失）の判断を求めるのが順序であるが、本稿は手始めとして要点をしぼり、易断を行うための基礎知識である「時・処・位」とき・ところ・くらい「正・中」ただし「元亨利貞」もとより（元もといに亨とよりて貞ただしきに利よろし）「吉凶悔吝」きつぎようかいりん（得失と憂虞ゆうぐ）について考えをめぐらしていきたい。神社の「おみくじ」などと違ってその言辞は難解であり、易断の知識には、周易とは何かを示唆するものを多く含んでいるからである。

一、時・処・位

儒教をはじめ中国の古代哲学では思惟の基本的な概念として、時（時間）・処（空間）・位（地位）が説かれることが多く、周易もその例に漏れない。

「時」は現代語のタイミングに相当する。「論語」の有名な一節に「学びて時にこれを習ふ、亦樂しからずや」という言葉がある。「学ぶ」とは新しい知識を教えられることであって、「習ふ」はその知識を復習し練習することである。この場合、時は復習し練習するのに適当な時という意味で、例えば学生なら下校後の静かな時間を指すであろう。ふだんは怠けておいて試験間際に徹夜して復習するなどは時ではない。その他、王侯が農民を公用に使役する場合、農閑期を選ぶことを「時に使ふ」といった例もある。

卦辞などには、「（随の）時の義、大いなるかな」などとあって、その卦の指示する「時」が重大局面に際していることを述べているが、卦に示された吉凶（得失）の判断を現実の局面に当てはめて考えた場合であっても、時を考慮しなければ、吉凶にとらわれて判断を誤ることになる。

孔子についてこんな話がある。一人の弟子を使いに出したところ、予定の時刻になっても戻ってこない。そこで心配した弟子たちが占筮をしてみると鼎（䷱）の卦が出て、九四の爻に当たると判定された。そこに「鼎足を折り（中略）凶なり」とあった。「大きな交通事故で戻れないのだろうか」と弟子たちはますます心配に沈んでしまったが、孔子だけは平然として、「彼は船に乗って出かけたのだから足が無くとも戻ってくる」と言った。果してその弟子は間もなく無事に戻ってきた、という逸話である。

「処」は時ほどには重視されていない。周易は変化流通の理を説くものであるから、処を軽視するのは当然かもしれない。

れない。方位についてだけ簡単に述べておくことにしたい。

「天地位を定め、山沢氣を通じ、雷風相い薄り、水火相い射わずして、八卦相い錯わる。往を数うるは順にして、来を知るは逆なり。これ故に易は逆数なり」（『説卦伝』）。

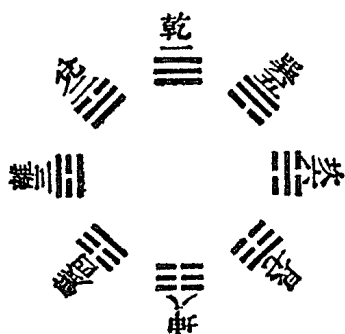
（八卦を自然現象にひきあてて考えて見ると、天（乾）と地（坤）は上下に位置を定めながら互いに牽きあい、山（艮）と沢（兌）は平地から見て凸凹相反する立場にありながらその氣を通じあい、雷（震）と風（巽）とはたがいによりあつてその威をはげしくし、水（坎）と火（離）とは全く相反する性質でありながらたがいに厭うことなく力をあわせてひとつのはたらきをなしとげる〔たとえば煮炊きの作用〕。このように八卦はその作用を交錯させることによって、つまりは八八、六十四卦を形成することによって、天下のあらゆる物事を包含しつくすのである。

既往のできごとを数え知るのとは、知りやすいから順であり、未来のできごとを予知するのは、知りたいから逆である。この意味で易は逆数——あらかじめ未来を逆えて数え知るといふはたらきのものである。）

〔高田真治・後藤基已訳より〕

この文に基づいて上の図「伏羲・八卦方位」が作られ、伝えられている。（注、現代の地図とは逆で、乾が南、坤が北、離が東、坎が西になっている。）

伏羲八卦方位



後に、干支と混用されて五行思想に利用されたり、家相を説く占いに取り入れられたりしているが、これらは周易と無関係である。

「位」は広い意味での社会的地位を意味する。位について考える時は、常に時と処とを考慮することが必要とされ、抽象的に捉えられた概念ではない。例えば、家庭にあつては家長の地位にある人でも勤め先では平社員であつたり、その同じ人がスポーツのクラブでは部長であつたりする。位もその

時と処によつて変化するわけである。

おおよけ 公の地位を利用して私的な事柄に無理を通そうとしたり、逆に親族関係などの私的な地位を公の場所に持ち込んだりすることは、現代の社会でも往々にして起こりがちで、トラブルと混乱の原因になる。その点は古代社会でも人情に変わりはなく、位についても、儒教を中心として倫理的に説かれることが多い。

なお、位を重んじる縦の社会構造、それに基づく縦の道德が東洋（中国や日本など）倫理の特徴にされ、非現代的として排斥される一面がある。確かに後世の儒教道德は次第に窮屈な位偏重に陥っている。これは周易が説く変化流通の理を忘れて固定的思考に頼った結果である。例えば、親子の関係は孝慈、すなわち子の孝行と親の慈しみとの交流によつて成立する関係であることを、一方的に孝のみを強調すればその弊害は当然起こってくるわけである。また、周易が時間的な流れを主として説くため縦の関係を述べている章句が多いのは事実であるが、決して横の関係を無視しているわけではない。中国の古典には、「管鮑の交わり」とか「水魚の交わり」など友情の強さを述べた故事が多く成語として現在も用いられるが、「断金の交わり」という成語の出典は周易である。

これは、「二人、心を同じくすれば、その利、金を断つ」から出たもので、朋友が二人で心一つにして事に当たれば、その鋭利さは金属を断ち切るほどである、と友情の力強さを強調した言葉である。

更に言えば、「忠」という言葉も中国の古典では忠実の意味に使われた用例が多く、君主に対する臣下の忠義ばかりが強調されたわけではない。

三段の卦を八卦と言ひ、その三段を二つ重ねて六十四卦と称し、その一段ずつを位と呼ぶのであるが、この卦形における位については、後の別稿で述べることにしたい。八卦や六十四卦についての部分で触れる方が理解しやすいと思われるからである。ただ、ここでは実社会における人間関係の位を象徴的に示すものであるとのみ述べておきたい。

二、正と中

正せいと中ちゅうとはいずれも卦形の位についての術語である。八卦あるいは六十四卦の、三段、六段の卦形の一段ずつの位くらゐ毎に、陰か陽かを一つずつ置くと考え、その一陰または一陽を爻こうと称するのであるが、「正」とは陽爻が陽位にある場合、あるいは陰爻が陰位にある場合、つまり爻と位との陰陽が一致する場合を指す。もし、陽爻が陰位にありたり陰爻が陽位にありたりする場合は「不正」とする。位の陰陽は、下から数えて奇数の位を陽、偶数の位を陰と規定している。「中」とは、陰陽に関係なく、爻が中間の位にあることを言う。他の位にある爻は「不中」と称する。ただし、中は八卦重視であるので、六十四卦の場合は上体下体と二分して、下から二段目と五段目とを中とし、他の段を不中と規定している。

これら正と中については、その社会的意味や周易における意味などは八卦や六十四卦を述べる後の別稿に譲り、ここでは六十四卦中の具体的な用例を示すにとどめたい。

例えば占筮して需卦(䷄)を得たとする。卦は時を示すものであるから、需に「待つ」の意味があることを考えて、「妄みだりに動かず、静かに待機して時勢を静観せよ」という意味であると解釈する。九五の爻辞には「酒食しゅしに待つ。貞なれば吉なり」とあり、「象しょうに曰く、酒食の貞吉とは、中正なるをもつてなり」と説明されている。「酒宴してゆつくり待つていて宜しい。それは九五の位が中正であるからである」という意味である。

この例で分かるように、九五の位は上体の䷁(坎)の中にあり、五という陽(奇数)の正しい位に在るから安定していて、最良の時を得ているという判断が出るのである。

続けて、三例を挙げて述べることにしたい。

(a) 師(䷆)の九二、「師(軍隊)に在りて中ず。吉にして咎なし」。(中だが、正ではない。)

(b) 随(䷐)の初九、「官渝(かむ)ることあり。貞なれば吉なり。門を出でて交われば功あり。象に曰く、官渝ることあるは、正に従えば吉なるなり。門を出でて交われば功ありとは、失なわざるなり」。(正であるが中ではない。)

(c) 臨(䷒)六三、「甘んじて臨む。吉にして利ろしきところなし。既にこれを憂うれば咎なし。象に曰く、甘んじて臨むとは、位当らざればなり。既にこれを憂うれば、咎は長からざるなり」。(正でも中でもない。)

「時・処・位」の基本的な概念で規定すれば、「正・中」はいつでも位であるが、中は時に対応し、正は処に対応する。中は全ての価値が激動し変転する乱世に処する気配りであり、正は治世の整った天下泰平の時代の道德である。つまり、時は流動的であり、処は固定的であるということである。

この理に通じていれば、たとえ卦辞・爻辞や十翼の言辞の意味が理解できなくとも、その卦形を頼りに実社会における自他の位置を思い合わせれば、これから先、如何なる心がまえで如何なる行動を取るべきかについて充分に参考になると言えるであろう。

右の(b)例〔随〕においても、これは転任の場合であるが、単身赴任を余儀なくされて憂慮することは、現代の社会でもその例は多い。不安定(不中)な生活に陥るだろうが、それが正しい筋道(正)による官命などであるならば、従う他はない。新しい任地における新しい人間関係(交わり)を大切にすれば、必ず未来に向かって道が開ける、と随卦は教えているのである。

三、元亨利貞

周易巻頭の乾卦を見ると、「乾、元亨利貞」(乾は、元おおいに亨とおりて貞ただしきに利よろし注)と卦辞が記されている。以下、

やはり各卦の初めにこの四文字の全部か或いはその幾つかが記されているが、中には全く記されていない場合もある。また、この四文字に続けて吉と記されていたり、この四文字の意味を限定するような言葉が間に挿入されたりする。他の慣用語についても同様だが、周易の用語には、その意味も用例も例外が多くて扱いにくい。おそらく長い伝承の間に、後世の学者の注釈が混入したり、字句が脱落したり誤写されたりしたのではないかと考えられる。以上の事実を断つておいて、以下ではなるべく一貫し筋が通るように述べていきたい。

元亨利貞（元いに亨りて貞きに利ろし）は、吉凶（得失）の判断に重大な関係を持つ断定的な言葉ではあるが、吉凶断定の言葉ではない。一卦を擬人的に考えればその卦の性情（徳）という意味になり、卦がその時を示すと解すれば、その時の状況という意味になる。この二義は同じものを両面から見て言っているだけであるから、そのどちらかを当てはめれば、どの卦にも通じることになる。

「元」（元いに）は偉大という意味で、人ならば大人の、時ならば重大な大局面である。「亨」（亨りて）は通じることとで、変通し、行く先の見通しが明るい時、或いはそういう局面に立つ人の意味である。「利」（利ろし）は有利の意味で、これは人にも時にも理解し易い。「貞」（貞きに）は正しい意味で、保守的或いは女性的な正しさを意味する場合が多い。そのような人、または貞正を守るべき時の意味である。蒙卦には「蒙は亨る（中略）貞しきに利ろし」とあり、師卦には「師は貞なり」とある。また坤卦には次のように記されている。

「坤は、元いに亨る。牝馬の貞に利ろし。君子往くところあるに、先んずるれば迷い、後るれば主を得。西南には朋を得、東北には朋を喪うに利ろし。貞に安んずれば吉なり」。

（坤䷁は六爻皆陰、純陰の卦、（中略）占つてこの卦を得る者は、その望みが大いに通る。ただし牝馬のような従順・貞正の態度をとり保つべきである。この陰柔の人は事を行なうにあたって、人の先に立とうとすれば、かえって迷って道を失うが、人の後に従うように心がければ、頼るべき主人を得て迷うことがない。方角を言えば、西南

(陰の方位)においては同類の友を得てもとより吉であり、東北(陽の方位)においては同類(陰)の友を得られぬが、従順の徳を失わず陽剛に従えば結局は慶びがあつてよろしい。要はいかなる場合にも貞正に安んずれば吉である」〔高田真治・後藤基巳訳より〕。

乾の場合は、すべての時・処・位において元・亨・利・貞なのだが、坤の場合には、元・亨は乾と同じで、その貞には「牝馬のような」という修飾語による限定がつき、更に、その利には「牝馬の貞の場合に」と限定されている。牝馬は、中国では、従順でねばり強い動物の代表である。牝が牡よりも従順であると考えるのは、日本でも中国でも同じだが、中国の馬は日本の馬と違って、小型であつて競争馬には適していないが、遠距離をどこまでも歩み続ける耐久力においては、とても日本の馬の及ぶ所ではない。これは古代も現代も変わることはない事情である。

次に、一応は「元亨利貞」(元いに亨りて貞きに利ろし)と記して、それに続く文においてその限定条件を記している例を挙げておきたい。

「䷐ 随。随は、元いに亨りて貞きに利ろし。咎なし」。

これは、乾卦の無条件で積極的な元亨利貞(元いに亨りて貞きに利ろし)と比較して、消極的な元亨利貞である。「咎なし」とは、とがめが無い、無難であるという意味である。

「䷌ 屯。屯は元いに亨りて貞きに利ろし。往くところあるに用うるなかれ。侯を建つるに利ろし」。

下体の震(䷲)は雷、上体の坎(䷜)は雲を象徴していて、間もなく雷が止み、雨が上つて晴れるだろうという意味での元亨利貞(元いに亨りて貞きに利ろし)であつて、建国の初期にたとえば、国外への進出を急いではいけない、まず内政に努力すべきであるということになるので、これも無条件の元亨利貞ではない。

元亨利貞が一応、連なつて記されているのは、六十四卦中、「乾・屯・随・臨・无妄・革」の六卦にすぎないが、

その中で全く無条件無限定の記述は乾卦の場合だけである。

では、乾卦は絶対に幸運な情勢を指示しているのだろうか。なるほど乾卦は純粹であり、独立しており、その上に積極的である。上昇気流に乗る時を表しているが、その微妙な変化の姿は各爻の爻辞に求めなければならない。これは乾卦に限らず、他の卦においても同様である。例として乾卦の初九、九二の爻辞を示しておきたい。

「初九、潜龍なり。用うるなかれ」。

潜龍とは地中に潜む龍であって、将来有為の人の幼少の頃にたとえる。「用うるなかれ」とは、まだその才能を発揮すべき時期ではないという意味である。幼少の頃は世間知らずのため向こう見ずになり易いので、「まだ十年早い」とその暴走を戒めているのである。

「九二、見龍田^{でん}に在り。大人を見るに利ろし」。

田は地上である。まだ実社会に出るまでに至っていないが、ようやく地上に顔を出して、世間を見る眼も少しは養われた段階である。大人（すぐれた人）を見てこれに見習い、教えを受けるのに有利な時期である。この利が、限定された「利」であることに注意すべきである。世の中に、絶対有利な状況や、何をしても許される人間など存在するはずがない。周易はその道理をくり返し教えているのである。

四、吉凶悔吝

「吉凶悔吝^{きつぎようかいりん}」について、「繫辞伝^{けいじでん}」には次のように説明されている。「吉凶とは失得の象なり。悔吝とは憂虞^{ゆうぐ}の象なり」（吉凶とは、事の得失の象徴であり。悔吝（悔とは凶に居ながら後悔憂慮して吉に赴くこと、吝とは吉に居ながら逸楽猶予して凶に陥ること）とは事後に生ずべき憂い虞^{おそ}れの象徴であり）（高田真治・後藤基巳訳より）と。

また、「吉凶とはその失得を言うなり。悔吝とはその小疵しょうしを言うなり。咎あやまなしとは善く過ちを補うなり」(吉凶とは占う事の得失を言うものであり、悔吝とは吉凶ほどには決定的でない小さな疵「欠点」を言うものであり、咎なしとは、本来なら咎となるべき過失を努力によって善く改めつぐなうことである)〔同前訳〕と。

すなわち、吉凶とは決定的な成功と失敗(得と失)を指すのであり、悔吝とは、吉凶のいずれかに行き着く途中で立ち止まり、将来を案ずる(憂慮する)ことである。この段階で善処して過去の過失を補えば、凶に至らず吉に向かうことができる。いわば、悔吝は小さな疵きずであって、大事に至らないわけである。なお、吝とはうらむ(恨)・おしむ(惜)の意味があつて、周易では、悔よりもその疵が軽い場合を指す。

この周易の考え方は、「論語」などに見える孔子の考え方の先駆をなすものでないかと思われる。孔子は、その多くの弟子の中で最も期待をかけた顔回について「過ちを再びせず」(「繫辞伝」より)と言つて賞めている。どんな天才でも、一事について一度は過失があるものであり、それは許されるものであると孔子は考えていたのである。現実主義的な人間観であると言える。

吉凶悔吝は、いわゆる運勢を判断する言葉であるが、元亨利貞と同じく限定されたものが多く、中には卦辞にも爻辞にもこの四者のいずれも記されていない場合さえある。かなり自由な使い方がされていて、この言葉にこだわつて判断を下すべきではない。この点においても元亨利貞と同様である。

卦辞における用例を挙げると次のようである。

「頤いは、貞しければ吉なり」(頤卦)。

「離りは、貞しければ利ろし。亨ひん。牝牛めしなを畜やしなえば吉なり」(離卦)。

離卦(☲)は上体も下体も陰卦で、しかも中爻(六二と六五)が陰であるので、その連想から柔順な牝牛を飼えば運が開けるとして吉と判断するのである。

次に爻辞の例を挙げておく。

「初六、鳴豫す。凶なり」。

これは豫卦(䷏)の初六の爻辞である。豫(予)は和樂の意味であり、鳴は上位の九四に対応し(陰と陽)鳴動する意味である。初六は不中不正であつて、鳴は条件ではなく説明であると考えられる。決定的な凶である。

そこで、ひたすら耐え忍んで六二にまで一段階上がれば、次のようになる。

「六二、介かたきこと石いしの于こし。日を終えず。貞にして吉なり」。

介かいはしっかり何ものかに取りつくことで、石の如く固く己を堅持する意味である。「日を終えず」は短い時間のこととで「間もなく」の意味である。なお、中国人には蒋介石をはじめ介石と号する人が、多く歴史上に登場してくるが、隠忍自重を尊ぶ伝統的な氣風がうかがえる。

各爻の占める位くらゐと吉凶との関係については、「繫辞伝」に細かく述べているので、その部分を掲げておくことにしたい。

「易の書たるや、始めはじを原たずね終りを要もとめて、もつて質となすなり。六爻相あひい雜まじるは、ただその時の物なり。その初しよは知り難く、その上じやうは知り易し。本末なればなり。初は辞もてこれに擬なぞらえ、卒おわりはこれを成して終る。もしそれ物を雜まじえ徳を撰まび、是と非とを弁わぜんとすれば、その中爻にあらざれば備あわらず。噫あまた存亡吉凶を要するは、居ながらにして知るべし。知者その彖辞たんじを觀みれば、思おもひ半なかばに過あぎん。

二と四とは功を同じくして位ことを異にし、その善同じからず。二は譽ほまれ多く、四は懼おそれ多し。近ければなり。柔の道たる、遠きに利ろしからざる者なれど、その要の咎とがなきは、その柔中を用うればなり。

三と五とは功を同じくして位を異にす。三は凶多く、五は功多し。貴賤の等なり。その柔は危うく、その剛は勝たえんか。」

(易という書物は、物事の始めを推し原ね終りを探り要めて、卦全体の本質を決定するものであり、卦中の六爻に陰陽錯雜して生ずる変化は、その時々^{とき}の事態物情を示しているのである。さてその六爻のうち、初爻の意味は判りにくく、上爻の意味は判りやすい。これは初爻が事物の始本を、上爻がその終末を示すものだからである。つまり初爻はいろいろな辞^{ことば}によって事物の始本に擬えようとするのであるから判りにくいのに對し、卒^{おわ}りすなわち上爻の場合の成就・完成したところでこれを見るものであるから判りやすい。さらにまたさまざまの事態物情を雜^{まじ}え挙げてその卦の徳を撰び定め、是非のけじめをつけようがためには、中間の四爻がなくては十分とは言い得ないのである。してみれば卦爻の全体の中にこそあらゆる存亡吉凶の道理が要約的に示されていることは居ながらにして知り得ることであり、知恵のすぐれた人に至っては、卦のはじめに繋^かけられた彖辞(卦辞)を觀ただけでも、卦全体の示す意義を大半は察知し得るというものである。

なお中間の四爻について言えば、第二爻と第四爻は、ともに陰の位であつて陽(君)を助けるという働きは同じであるが、第二爻は在野の賢人、第四爻は君側の重臣という点でその位地には相違があり、従つてその善の度合いも同じでない。第二爻には名譽を得る機会が多く、第四爻には畏懼すべき事態が多く示されるのは、第四爻が君位(第五爻)に近いからである。なるほど柔(陰)の道としては、たよるべき剛(陽)に遠いということは不利なはずであるが、第二爻が結果的に咎なきを得るのは、それが柔中(陰の正位に当りしかも内卦の中に居る、すなわち中正)の道を得ているからである。

また第三爻と第五爻はともに陽剛の君子という点でその働きは同じであるが、第三爻は在下の臣、第五爻は君主という点でその地位に相違がある。第三爻は凶を招くことが多いのに對し、第五爻は功績を揚げる機会が多いというのは、貴賤の等級の相違によるのである。ただし三・五の位に当る者が柔(陰)であつてはやはり危険であり、剛(陽)であつてこそはじめてその任に耐え得るというものである)〔高田真治・後藤基巳訳より〕

要するに、一卦の各爻について初爻や上爻も大切であるが、その卦の徳（元亨利貞）や是非（吉凶悔吝）を細かく観察しようとすれば、中爻（二・三・四・五の四爻）が重要であると述べている。

中爻について、「功を同じく」とは、二爻と四爻とは陰位にある点は同じだという意味で、その位の上下の差によってその善（有利さ）が異なってくる。「近ければなり」とは、四爻の方が二爻より五爻に近いからだという意味である。五の位が尊重され、一卦の中心的な位とされているからである。

では、なぜ一卦の中枢に近い四位に「懼れ」（咎めを受け易いこと）が多く、中枢から遠い二位に「誉れ」（名誉を受け易いこと）が多いのだろうか。これは周易に多く見られる逆説であって人情の機微を説いたものである。

実社会の例を取れば、何処の会社でも柔軟性（陰）を必要とする役割というものがある。その中で、秘書室勤務などは、社長に近づく機会が多くて有利なように見えるが、自分の隠しておきたい弱点をさらけ出す機会も多いのではあるまいか。これに反して窓口勤務などは、積極性は無くても柔軟に職務を果していれば、案外好評が上司の耳にも入り認められることもある。但し、四位が不中であるのに対して二位が中の位である点を考慮すべきである。正位（自分に相応した位）を守るだけでなく、その時その時に応じて、中庸を求める心くばりが必要なのである。この「中」の心得があれば、中位に遠い地位にあることから生ずる多少の失敗も「咎なし」で無難にすませられるのである。

三爻と五爻についても同様で、その功（陽位）は同じだが、上下の差がある。三爻に凶が多く五爻に功（吉）が多いのは貴（五）と賤（三）との順序によるものである。但し、注意すべきは五爻が中の位にあるのに対して、三位が不中であることである。これは二と四について既にそのことを述べたので、ここでは省略したと見るべきである。

「その柔は危うく、その剛は勝えんか」とは、位が高くて中の位だからといっても必ずしも有利とは限らないので、

陰柔の人が五位を占める場合（六五）にはその地位は危うく、陽剛の人が五位を占める場合（九五）の方がまさるだろう、という意味である。

次に、「悔・吝」の用例を掲げておきたい。

「九三、父の蠱を幹す。小しく悔あれども、大咎なし。象に曰く、父の蠱を幹すとは、終に咎なきなり。」（蠱卦、九三の爻辞、及び象辞）

「蠱」は事（こと）という意味で、「幹す」は配慮して事を正しく執行するという意味である。本来なら父が主宰すべき家庭的行事、例えば祭事や親族会議などを長子が代行する場合である。蠱卦の卦形は☶☵だが、九三は中位でないから「小しく悔あ」りと判断される。しかし、正位（陽爻が陽位）だから、「大咎」が無くてすむわけである。父の代行だから父ほどにはうまく事を処理できないだろうが、努力すればほどほどの成功となり許されるわけである。

「初六、童観す。小人は咎なし。君子は吝なり。」（観卦初爻の爻辞）

「観」とは示すことである。初爻は幼少の人や物事の低い段階を一般に象徴している。子供っぽい示し方（自己顕示）は、教養の程度の低い人なら許されるが、紳士と認められるような人はあまりしない方がよいという意味である。

君子と小人とは対立語で、周易ばかりでなく中国の古典に多く用いられている言葉である。社会的地位の高低によって区分する場合と、徳のある人か無い人かで区別する場合とがある。上古においては、この二つの場合は一致すると素朴に考えられていたが、天子にも暴君がいたり、位はなくとも有徳の人がいたりするところから、二つの意味を持つようになった。この場合も、どちらの意味でも通じると言えよう。

× × × ×

冒頭で述べたように、周易は占筮の書であり人生哲学の教典でもある。占筮易断の知識には、当然のことながら周易とは何かを示唆するものを多く含んでいる。占筮易断の基礎知識「時・処・位」「正と中」「元亨利貞」「吉凶悔吝」について、以上で、そのあらましを述べ終えたことになる。この他に、占筮易断の知識として「連想と暗示」や「偶然・必然・こじつけ」といったことも考えていきたい。これらについては、紙幅もあり続稿とすることにした。

注、周易の乾卦について、「元亨利貞」を乾の四徳すなわち元・亨・利・貞として解する説を本稿では割愛した。記してことわっておきたい。

〔付記〕本稿の周易における引用や訳については、高田真治・後藤基巳訳『易経上』『易経下』（ワイド版・岩波文庫 一九九三年八月）に拠った。